

対立したままでの連帯

——精神障害者のグローバルな草の根運動の組織構造——

伊 東 香 純*

1 はじめに

精神障害についての歴史の多くは、その人たちを治療したり管理したりする人の実践やその基盤をなす考え方の変遷の論述であった。その歴史記述において、治療や管理の実践に批判的な視点がある場合でも、精神障害をもつ本人たちは受動的な対象とみなされてきた (Porter 2002; Scull 2016)。また、障害者運動の歴史においても、精神障害者は初めから運動を構成する一員として位置づけられてきたわけではない。障害の種別をこえた国際組織である障害者インターナショナル (Disabled Peoples' International: DPI) は、医療・福祉専門職と障害者の共同の国際組織において障害者の意見がないがしろにされているという理由から、共同の組織から独立するかたちで1981年に結成された。精神障害者も DPI の構成員であるが、その発足当初、DPI の意思決定の場に精神障害者はほとんど参加していなかった (Driedger 1989=2000)。このように精神障害者の社会運動は、関連する学問や社会運動の歴史において周縁的な存在とされてきた。このような状況の中、後述するように米国と英国を中心に精神障害者の運動が考察されるようになってきている。それらの研究が焦点を当ててきたのは、精神医療の専門職と精神障害者、及び精神医療に関する精神障害者どうしの主張の共通点と差異である。しかし、精神障害者の運動における連帯や対立を可能にしてきたそれぞれの組織の構造は、注目されてこなかった。これまで検討されてきた英国や米国などの精神医療体制の確立した地域の運動は、精神医療体制が確立しておらず精神医療に対する抵抗を目標にした連帯が形成しにくい低開発地域とも連帯して世界規模の組織をつくってきた。また、それぞれの国では別々の組織として対立していた組織どうしが、世界組織ではともに一つの組織の構成員として連帯してきた。そこで本研究は、精神障害者の世界組織において、構成員が増え活動地域が拡大した時期に、どのようにしてそれらの構成員同士の連帯を築こうとしたのかを組織の構造に着目して明らかにすることを目的とする。

2 先行研究の検討と本研究の対象及び方法

2.1 先行研究の検討

精神障害者の社会運動に関する記述は、1970年代以降の英国と米国の運動を主な対象としてきた。米国の運動を牽引してきたチェンバレン (Judi Chamberlin)¹は、米国の運動は家族や友人、精神医療の専門家と分離した、元患者のイニシアティブを重視したものであったと述べている。その理由は、米国の精神障害者の運動が影響を受けた女性解放運動やゲイ解放運動は、自分たちの経験は、同じ状況におかれていない人たちには理解できないと考え、自己決定や自己定義を重要視してきたからだという (Chamberlin 1987: 24)。これに対して、英国の組織を牽引してきたキャンベル (Peter Campbell)²は、「サバイバーズは発言する (Survivors Speak Out: SSO)」などの英国の精神障害者の組織の発足には、1980年代半ばに特に米国やオランダの精神障害者の運動の考え方や実例が入ってき

キーワード：精神障害、グローバルな社会運動、草の根運動、精神医学、資源動員

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2015年度入学 公共領域

たことや、BNAP³がトリエステ県の精神医療改革運動の関係者を連れてきたことによる影響が大きいと述べている (Campbell 1996: 221)。また、英国で精神障害者だけの組織ができる以前の歴史について社会学者のクロスレイ (Nick Crossley) は、英国の今日の運動に直接つながる最初の運動は精神病患者組合 (Mental Patients' Union: MPU) であるとする。MPU は、ロンドンの民主的治療的コミュニティであるパディントン・デイ病院を閉鎖して薬物療法などを使用したより伝統的な介入をおこなう病棟にしてほしいという政治的な要求に抵抗して 1971 年に結成された (Crossley 2006: 144-146)。米国と英国における専門職と精神障害者との関係について医療社会学者の美馬達哉は、米国では「精神障害者自身のイニシアティブを重視する傾向がより強い」(美馬 2016: 83) と述べている。

また、精神障害者の運動どうしの精神医療体制に対する批判の仕方の違いも主要な分析対象の一つとされてきた。その違いは、精神医療体制の廃絶を主張する運動とその改良を主張する運動の 2 つに大きく分けられてきた。米国では 1977 年、国立精神衛生研究所によって、長期間施設に収容されてきた精神科の患者の脱施設化による問題に対応しようとして地域支援プログラム (Community Support Program: CSP) が開始された。この頃、精神障害者の運動は、それまで排除されてきた会議や立法府のヒアリングに参加したいと考えるようになり、その希望は徐々に実現していった。そのような活動の一つの成果として、患者が運営するプログラムに対する資金提供を CSP に認めさせた (Chamberlin 1990: 328-329; McLean 2000: 826)。モリソン (Linda J. Morrison)⁴ は、この資金獲得は後に運動の分裂につながってしまったと分析している。1980 年代後半、急進的な元患者の運動は抑えられていき、自助活動をおこなう精神医療の消費者としての運動が前景化していった。連邦政府の精神保健の資金を求めるあるいは受け入れるべきかについて、精神医療体制の廃絶派と改良派のあいだに対立がおきた (Morrison 2005: 82-84)。このような混乱により、1973 年から年 1 回開催されていた「人権と精神医学の抑圧についての委員会」の会議は 1985 年に終了し、1972 年 8 月からほぼ毎月発行され各地の運動を繋いできたマッドネス・ネットワーク・ニュース紙は 1986 年で終了した。それにより大きく 2 つに分裂した運動は、接点を失う形で発展していった (McLean 2000: 825-826; Morrison 2005: chap. 3)。他方、英国の MPU のネットワークは、何度か名称を変えたのちに 1985 年に「精神医学による抑圧に反対するキャンペーン (Campaign Against Psychiatric Oppression: CAPO)」という名称になった。クロスレイは、この過程について関係者にインタビューをした上で、組織の名称に患者や治療という用語を使わなくなったことに注目して、この時代に精神医療の言語に依らない新しい運動の言語が使われ始めたと分析している (Crossley 2006: 172-173)。また、1986 年に SSO が結成されたあと、英国の精神衛生運動の初期に結成された組織であるマインド⁵の会議の影響とオランダのグループの支援により、「英国権利擁護ネットワーク (United Kingdom Advocacy Network: UKAN)」も結成された。SSO と UKAN はとてもよく似た組織であったために資金獲得やメンバー動員などで緊張関係にあったと指摘されている (Crossley 2006: 188)。さらに、マインドからも 1987 年に精神障害者だけのネットワークがマインドリンクとして独立し、1993 年までに 1000 人を超えるメンバーを動員している (Mind 2017)。

このように英国と米国の精神障害者の運動は、これまでの研究において、精神医療体制やその存在を必要としている社会を仮想敵として活動してきたとされている。その運動における専門職との連帯の基盤は、精神医療の現状に不満をもち変革を望むという類似した主張にあるとされてきた。さらに、精神障害者どうしの連帯においては主張の類似性に加えて、同様の経験をしていることが重要であるとされた。精神医療において自分の体験に病気というレッテルを貼られ、それを根拠にときに自分の意思に反する入院や治療を受けてきた経験を踏まえて、精神障害者の運動は元患者や精神医療のサバイバーなど精神医療による診断とは異なる用語を自分たちのアイデンティティとしてきた。また、精神障害者の運動における改良派と廃絶派は、時期や場所によっては深刻に対立し、別の組織を作って離れて活動してきたことが明らかにされてきた (McLean 2000: 825-826)。しかし、そのような相違や対立がある中で精神障害者がどのように世界規模で連帯してきたのかについては、ほとんど焦点が当てられてこなかった。本研究では、精神障害者の世界規模の連帯の基盤を明らかにするために、世界組織の組織構造に関する議論を分析する。

2.2 対象と目的

本研究は、精神障害者の世界組織である精神医療ユーザー・サバイバーネットワーク (World Network of Users

and Survivors of Psychiatry: WNUSP) を対象とする。WNUSP は、2001 年に 1 か国から複数の全国組織が正会員になれるという会員規定を設けた。本稿は、WNUSP が内規を採択する 2001 年の第 1 回総会の準備から 2004 年に第 2 回総会までの期間を主な検討の対象とする。加えて、そのような会員規定を設けた背景である WNUSP の発足後の経緯も分析の材料とする。WNUSP は、1991 年に発足して以来 2 年に一度総会を開催してきた。しかし、2001 年の総会は WNUSP の第 1 回総会と位置づけられており、そのとき WNUSP は組織として発足しなおしたと認識されている。同じ時期、総会の参加者の活動地域が大幅に拡大した。本稿は、この過程から WNUSP が多様な構成員の連帯をどのようにして築こうとしたのかを明らかにする。

そのための資料として、関係組織や会議の議事録や報告などを使用する。また、世界精神医療ユーザー連盟 (World Federation of Psychiatric Users: WFPU) の初代議長を務めたニュージーランドのオーヘイガン (Mary O'Hagan) にインタビューした。インタビューは、2016 年 9 月 3 日と 12 日の 2 日間で 4 回、9 月 3 日はオーヘイガンの自宅にて 88 分、9 月 12 日はオーヘイガンの職場にて 79 分、合計 167 分おこなった。また、対面でのインタビューのあと数回メールにて、インタビューの文字起こしの確認のほか、追加の質問についても回答を依頼した。

3 WNUSP 結成から 1998 年まで

1989 年に世界精神衛生連盟 (World Federation for Mental Health: WFMH) の世界大会がオークランドで開催された。WFMH は、精神障害者や医療者、家族などの合同の組織である。1948 年に発足してから 1997 年まで 32 名の WFMH の理事長 (president) は精神科医であり、事務総長やそれと同等の役職についてきたのも精神科医であった (Brody 2004)。1989 年の大会で精神障害者の世界規模のネットワークをつくらうという試みがなされた。しかし、そのときはいくつかの事項が合意に至らず結成には至らなかった (O'Hagan 2016-il)。その次の WFMH の世界大会はメキシコシティで開催され、再びネットワークをつくるための精神障害者だけの会議が開かれた。この会議では、米国の参加者たちが、ほかの多くの参加者には馴染みのないフォーマルな方法で会議を進行しようとしたり、「精神的な苦痛 (mental distress)」よりも「精神病 (mental illness)」という用語の使用を求めたりして、メキシコやヨーロッパの参加者からの反対にあった。世界大会の最終日には、オーヘイガンが、ネットワークのリーダーに米国の活動家になることを望まないメキシコやヨーロッパの参加者の支持を得てリーダーに選出された (O'Hagan 2016-il, 2014: 207-208)。選出の後、委員だけが集まって会議が開かれ、そこでネットワークの名称が世界精神医療ユーザー連盟 (World Federation of Psychiatric Users: WFPU) と決まった (WFPU 1991)。この名称に対しては、「かなり考え方の違った二つのグループが一つの名前 (ユーザー、被害者、サヴァイヴァー) を使うことはでき」(WFPU 1993=1993) ないといった批判が出された。

名称に関する同様の議論は、ヨーロッパの精神障害者のネットワークでもなされていた。ヨーロッパではアムステルダムとロンドンでの 2 回の準備会議ののちに、1991 年 10 月に第 1 回会議が開催されヨーロッパ精神医療のユーザー・元ユーザーネットワークが発足した (European Network of Users and Ex-Users in Mental Health 1994a: 7)。1994 年 5 月におこなわれたネットワークの第 2 回会議では、ドイツの代表団が 25 名の署名とともに「ヨーロッパ精神医療ユーザー・サバイバーネットワーク」という名称を提案したが、これは投票の結果、反対過半数により却下された (European Network of Users and Ex-Users in Mental Health 1994a: 46-47)。さらに、ヨーロッパのネットワークは、同年 12 月に「私たち自身の私達の理解」というセミナーを開催した。そこでは、自分たちの経験を特別なものとして理解すべきか、自分たちは障害者の一員であり障害者運動と連帯すべきかなどが話し合われた (European Network of Users and Ex-Users in Mental Health 1994b)。このような経過を辿って、WFPU は 1997 年の第 4 回総会で現在の WNUSP という名称になり、ヨーロッパのネットワークは 1997 年の第 3 回総会で現在のヨーロッパ精神医療 (元) ユーザー・サバイバーネットワーク (European Network of (Ex-) Users and Survivors of Psychiatry: ENUSP) という名称に変更された。

4 WNUSP の独立と動員

4.1 独立に向けた動き——1999年 WNUSP 総会

WNUSP の総会は、資金難により発足以来 WFMH の世界大会と同じ会場で開催されてきたが、1999年の WNUSP の総会に向けては7,500米ドルが用意されていた。これは国際障害基金 (International Disability Foundation: IDF) からの助成金だった (O'Hagan 1999)。この助成金を獲得するまえに WHO の会合が1998年10月にスウェーデンで開催された。その会議でオーヘイガンは、IDF の理事 (director) を務めており特に低開発国 (developing countries) で障害者組織を発展させる仕事をしていて、スウェーデンのギュッシング (Nils Gussing) に出会った。ギュッシングは、異なる地域から集まった精神障害者の小さなグループに対して資金的な援助とネットワークをつくる計画を立てるための専門的な助言をおこなうと提案した (O'Hagan 1999, 2016-il)。オーヘイガンは、その資金を使って、WNUSP の全体の総会の前にアイデアを共有しておくために少人数での会議の開催を提案した。そして、会議のための部屋を予約し、米国、南アフリカ、ブラジル、日本の活動家、ENUSP の共同議長1人ずつに招待状を送り、その人たちに自分の地域の出席者の推薦を依頼した。しかし、オーヘイガンは、招待状を送付したあとに WNUSP 委員会 (panel) が存在することをヨーロッパのメンバーから聞いて知った⁶。WNUSP 委員会はオーヘイガンが一人で総会を組織していることに混乱していた。オーヘイガンは、お金がなくては世界規模のネットワークを効果的に運営できないことをこの状況が明らかにしていると思うと WNUSP 委員会と少人数の会議の出席者に述べた。そして、可能な限り多くの委員が総会に出席できるようにすると約束した (O'Hagan 1999)。

1999年9月5日から10日にサンティアゴで WFMH の世界大会が開催された。4日から6日に開かれた WNUSP の少数のメンバーでの会議には、6か国から7名が参加した。7名うち4名は WNUSP 委員のメンバーであった。また、ギュッシングがアドバイザーとして出席した (WNUSP 2000a)。6日から10日の総会には、米国、オーストラリア、ニュージーランド、オランダ、日本、ドイツ、フィンランド、チリ、アルゼンチン、英国などから約50名が参加した (WNUSP 1999a)。

8日の総会では、WNUSP の意思決定の仕方が議論され、暫定委員会 (interim committee) を設けることが決まった。そして、世界を4つの地域に分けそれぞれの地域の参加者は、自分の地域の中から WNUSP の暫定委員会に入る人を決め、翌日発表することを求められた。意思決定は連絡の受信から応答まで4つの段階に分かれており、そのすべての段階に暫定委員会は関わるようになっていた。この総会では、議長の役職は設けず、すべての仕事と責任を暫定委員会のメンバー全員で共有することになった⁷。会議の決議⁸では、「この10年間に世界規模のユーザー・サバイバーのネットワークを形にし、発展させようという試みがいくつかなされてきた。しかし、どれも成功しなかった」(WNUSP 1999b) と述べられている。このことから、WNUSP はまだ組織として確立されていないと認識されていた。そのため「暫定」という言葉が使われたと考えられる。

4.2 会員規約の採択——2001年 WNUSP 総会

WNUSP は、2000年6月にさらなる資金的・技術的支援を求める申請書を IDF に提出した。申請書では、1999年11月から IDF にこのような申請書を提出しているが資金の獲得には至っていないこと、しかしながら内規の作成など組織の確立に向けた仕事や国連の障害者の機会均等化に関する基準規則のモニタリング委員などの活動を続けていることが述べられていた (WNUSP 2000a)。2000年7月から12月の計画では、17個の課題が挙げられ、それぞれについて期限と担当が決められていた。そのうちの1つに3年間の活動計画と予算計画を起草するという課題があった。3年間の活動計画に含まれるべきことの中には、会員規約の策定や他団体とのネットワーク形成と並んで、「低開発」国でのユーザー・サバイバーの活動を促進するプロジェクトが挙げられていた (WNUSP no date a)。

暫定委員会は、委員が WNUSP のために動ける時間は限られているため、WNUSP の事務所で週に1-2日働く人がいることが望ましいという理由で開発責任者という役職の設置を検討していた (WNUSP 2000a)。そして、資金管理と開発責任者のための事務所をデンマークの精神障害者の全国組織である現在あるいは過去の精神医療利用者の全国連盟 (Landsforeningen Af nuværende og tidligere Psykiatribrugere: LAP) が提供することになった (WNUSP no date a)。LAP が選ばれた理由についてオーヘイガンは、それは LAP のメンバーであり、1999年から

WNUSP の暫定委員を務めていたジェンセン (Karl Bach Jensen) の提案であり、デンマークはニュージーランドよりも活動に地理的に近かったからだと述べている (O'Hagan 2016-il)。また、開発責任者は LAP の事務局のリーダーであるハンセン (Eva Hansen) に一時的に依頼することに決まった (WNUSP no date a)。

2000 年 11 月 2 日と 3 日にオーデンセで暫定委員会の会議が開催された。この時点でアメリカ、アフリカ地域の 4 名の委員とは連絡がつかなくなっていた。この会議の冒頭には各国の運動の状況が共有された。ニュージーランドにはまだ全国組織がないこと、ドイツとオーストラリアには 600 人、800 人規模の全国組織がそれぞれ 1 つずつあること、日本とデンマークには 2 つの全国組織があることが各国の参加者から報告された。また、IDF から 30,000 米ドルの援助を得られたことが報告された。ジェンセンは、運営の仕事を進めるために委員を増やす必要があり、資金提供者に魅力的な団体になるためにもっと会員を増やす必要があることを述べた。このとき会員には、免除の申請を可能にした上で、年会費が設定されていた (WNUSP 2000b)。

2001 年 7 月 20 日と 21 日にバンクーバーで WNUSP の総会が開催された。WFMH の世界大会もバンクーバーで開催されたものの 7 月 22 日から 24 日であり、初めて WFMH の大会とは完全に別の日程で WNUSP の総会が開催された。この総会は WNUSP の第 1 回 (initial) 総会と位置づけられていた。出席者は 72 名で、そのうち 42 名がカナダ、12 名が米国からの参加者であった。また、組織として参加した団体は 12 か国から 34 団体であり、そのうち 12 団体はカナダの団体、10 団体は米国の団体であった (WNUSP 2001)。

総会では、まずこれまでの経過が報告され、そのあと規約が若干の修正の上で採択された。会員規定については、総会での修正はなされなかった (WNUSP 2001)。その規定では正会員は、次のように定められていた。

会員の地位は、WNUSP の目的や目標と矛盾しないすべての民主的に運営され合法的に構成されたユーザー・サバイバーの全国組織に開かれている。

1 つの国から 1 つ以上のユーザー・サバイバーの全国組織が正会員になれる。

精神医療のユーザー・サバイバーの全国組織が存在しない国や、全国組織が存在するが WNUSP の会員になっていない場所では、目標に矛盾しない地域組織が正会員になれる。ただし、その国の全国組織が WNUSP の正会員になるまで。(WNUSP no date b: 2)

また、準会員は「すべての世界中のユーザー・サバイバーの個人」及び「目的や目標が矛盾しないすべてのユーザー・サバイバーの地域及び国際組織」とされていた。正会員と準会員の違いは、総会で投票をおこなう代表者を選出できるか否かにあった (WNUSP no date b: 2)。それまでは個人として会員に登録していたが、全国組織が正会員、個人は準会員という規定を設けようとした理由についてオーヘイガンは、「国際的な権利擁護のネットワークとして WNUSP に地位を与えるためだと思う」と述べている。それぞれの国の考えを全国組織が代表していることにより、WNUSP に国際組織としての代表性を与えられると考えていた (O'Hagan 2017-il)。さらに、1 か国から複数の全国組織が正会員になれるという規定を設けた理由についてオーヘイガンは次のように述べている。

いくつかの国には 1 つ以上の全国組織があったからである。たとえば当時米国には 2 つの全国組織があった。私たちは、包摂的 (inclusive) でありたく、組織を選択しなければならないことを望まなかったのかもしれない。(中略) しかし、世界の一部 [の地域の会員] が理事の地位を独占してしまわないようには注意していた。(O'Hagan 2017-il)

また、ここでのユーザー・サバイバーとは次のように定義されていた。

狂気及び／あるいは精神保健の問題を経験している、及び／あるいは精神医学的／精神保健サービスを使っているあるいはそこから生還した人であると自認している人 (WNUSP no date b: 1)

その後の理事選挙では、4 つの地域の別々の国から 2 人ずつ 8 名の理事を選出し、そこから 2 名の共同議長と 1 名

の会計を選出することになった。しかし、このときアフリカ・中東地域からの出席者はいなかったため⁹、3つの地域から6人の理事と3名の代理人が選出された。この総会での投票は、規約が採択されるまでは個人が1票をもち、規約が採択されたあとはそれに従うこととされていた。理事選出は規約の採択より後におこなわれたため、正会員のみが投票をおこなったと考えられる (WNUSP 2001)。

4.3 WFMH から完全に独立——2004年 WNUSP 総会

2002年11月6日から2004年の第2回総会までに記録が残っているだけで5回の電話会議が開催され、それぞれ4名から7名が出席した。2004年の総会準備の議論のほかには、WNUSPのメンバーが出席した各種国際会議の計画や報告がなされた。とくに2001年の第56回国連総会で「条約に関する諸提案を検討するため」の特別委員会を設置するという決議が採択されたことを受けて、障害者権利条約の起草に向けた戦略が重点的に話し合われていた。

電話会議の中で頻りに議題にあがったことの1つが、低開発地域の会員の動員であり、理事を依頼できそうな活動家の情報が交換されていた。2回目の会議では、ジェンセンが、低開発国での会議に資金を提供するフィンランドの基金を紹介した。これを使って低開発国のメンバーに会い、新しい理事を見つけられるかもしれないと期待された。現理事が訪問できる可能性が高く優先的に訪問すべき地域として、インド、南アフリカ、ラテンアメリカ地域の3つが挙げられた (WNUSP 2003a)。5回目の会議では、ジェンセンが障害児教育に関するユネスコの会議でウガンダを訪問したとき、カンパラ市にある「ウガンダ精神保健」と連絡をとれたこと、彼らはWNUSPへの参加を希望しており、アフリカ大陸のネットワークをつくるための拠点になりそうであることが報告された。また、チェンバレンとジェンセンがWHOの会議で会った南アフリカの「ケープ精神保健協会」が、次の総会まで理事に加わることになった (WNUSP 2003c)。

2004年の総会に向けて、1回目の電話会議でLAPが今後3年間のための資金を受け取ったことが報告され、デンマークでの理事会と総会の開催を検討することとなった (WNUSP 2002)。2回目の会議では、ENUSPから2005年の総会の共同開催の申し出があった。この会議でジェンセンから、理事の中で多くの仕事をしているにもかかわらず、WNUSPの議長という地位をもっていないことに対する不満が表明された (WNUSP 2003a)。そして4回目の会議で、次の総会までは3名で共同議長を務めることになった。また、障害者権利条約の策定をリードしている会員が理事に加わった (WNUSP 2003b)。5回目の会議では、2004年の集会のことが主な議題となった。この集会には、WNUSPとENUSPの総会のほか、地域のワークショップ、集会を主催する組織となるLAPの半日間の催しを含めることになっていた。また、すべての人にとってアクセシブルな総会になるようにできる限りのことはしたいが、外国語の通訳者や手話通訳者を呼んだり点訳をしたりすることは予算的に難しい状況が共有された (WNUSP 2003c)。

2004年7月17日から21日までデンマークのバイルにあるバイルスポート大学でENUSPとWNUSP主催の共同総会が開催された。この総会は、WFMHの世界大会とは会場も日程もまったく独立して開催された。この会議の主な資金は、デンマークの社会政策省とLAPからの補助金によって賄われた (WNUSP 2004a)。このほか各地域のカンパ活動などにより「開発途上国からの参加者には全額渡航費が補助され、しかも参加費および宿泊費は当事者以外の者であってもフリーであった」(村上 2004: 41)。50か国以上から150名を超える者が出席した。この総会では、お互いどのようにつき合っていくつもりかを述べたバイル宣言が採択された。バイル宣言では、少数者を包摂しすべての差別と闘うことや透明な組織運営をおこなうことなどが宣言されていた (WNUSP 2004b)。強制治療に反対することや狂気を誇りに思うという思想を尊重することなどを述べた2001年総会での決議や、2009年の第3回総会で採択された障害者権利条約の履行に向けて闘っていくことを述べたカンパラ宣言では、自分たちの周囲の社会にどのような変革を求め、どのように関わっていくかを宣言している (WNUSP 2001, 2009)。これに対してバイル宣言には、自分たちのネットワークの中の行動について宣言しているという特徴がある。

5 考察

WNUSPの会員規定は、ユーザー・サバイバーと自認する人をユーザー・サバイバーと定義している。他者の承

認を必要としないことにより、さまざまな社会的状況にある人の動員を可能にしていることが指摘できる。とくに精神医療の確立していない地域の精神障害者は、精神医学的診断による正当化のないまま隔離や身体拘束を受けていることが少なからずある。しかし、これはさまざまな立ち位置の人を会員として許容するというわけではない。WNUSPは、医療者や家族との合同の組織であるWFMHから精神障害者だけで分離するかたちで発足した。ユーザー・サバイバーの支援者や周囲の生活者としての運動への関わり方は排除しており、あくまでもユーザー・サバイバー本人という立ち位置は明確にしている。

WNUSPは、2001年に内規を採択するまでは個人が会員として登録していた。このときの状態をWNUSPの会員は、ネットワークが確立されていないと認識しておりWFMHから完全に離れて開催する総会を第1回目の総会と位置づけた。WNUSPを世界のユーザー・サバイバーの主張を代表する組織にしたいという思いがあり、それが個人ではなく組織を正会員とした理由の1つであった。

先行研究は、各国の精神障害者の運動は単一の全国組織としてまとまっているわけではなく、複数の組織が緊張関係にある場合もあることを明らかにしてきた。WNUSPの暫定委員会の会議では精神障害者の全国組織が複数存在する国があることが報告されており、WNUSPの総会では全国組織とは限らないが1つの国から複数の組織が参加している国は少なくなかった。このため、DPIのように各国会議を組織内に設け、各国会議にそれぞれの国の組織が加盟するという方法では、世界組織に加盟できない組織や、加盟するために主張を曲げなくてはならない組織がある可能性があった。そこでWNUSPは、1つの国から複数のユーザー・サバイバーの全国組織が加盟できるという会員規定を設けた。これにより、1つの国に複数の全国組織がある場合に、それらの意見をすり合わせたりどれかを選別したりする必要がなくなり、対立した組織が対立したままWNUSPとして活動することが可能になっている。たとえば、2001年の総会では、米国から10団体が参加した。参加者のうち全国エンパワメントセンター¹⁰のチェンバレンや国際支援同盟（Support Coalition International）のオークス（David Oaks）は、ともに1970年代から精神医療の被収容者解放運動において精神障害者自身のイニシアティブを重視しながら活動してきた運動家たちである。これに対して、「取戻し（Restore）」などは回復を目指す慈善活動をおこなう団体であり、より緩やかな主張をもっている（WNUSP 2001）。これらの団体が米国の意見として見解をまとめてWNUSPに参加することは困難であると考えられる。

しかし、1か国から複数の全国組織が加盟できる場合、多くの全国組織がある国の主張がWNUSPの主張として採用されやすくなり、まだ運動があまり盛んでなく、全国組織が発足していない地域の声が反映されない可能性がある。しかしWNUSPは、まだ全国組織のできていない国の場合は地方の組織が正会員になれると定めている。さらに、組織の運営の中心となる理事には世界の4つの地域それぞれから会員が選出されるように枠を設けている。また、多くの全国組織がある国でもそれらの組織は一枚岩であるとは限らない。このため、このような会員規定が運動の盛んでない国のユーザー・サバイバーの声を反映しにくいとは必ずしもいえない。

6 結論

精神障害は、身体障害と比較して機能障害が明確ではない。このため、精神障害者とそうでない人の区別は曖昧なものに留まっている。精神医療体制の確立した地域では、精神医学的診断が両者を区別してきた。そして、精神医学的診断は精神障害者に対する非自発的な介入の正当化に使われてきた。そのような介入は精神障害者に苦痛を与え、精神障害者はこのような抑圧に対して抵抗運動を展開した。英国や米国の運動を主な検討対象とした先行研究は、このような精神障害者の運動の状況を精神医療に対する抵抗活動として分析してきた。これに対してWNUSPは、特定の敵対する者を想定せず、精神医療のユーザー・サバイバーとして抑圧されていると感じていることを連帯の基盤とした。また、各国の組織が対立したままWNUSPとして連帯できるような会員規定を設けた。これらのことからWNUSPの活動は、自分たちを抑圧してきたものに抵抗しそれを変革することよりも、被抑圧者として連帯しそれぞれの地域の運動を促進していくというアプローチをとっていたといえる。

[謝辞]

本稿の調査は、立命館大学生存学研究センター 2016 年度若手研究者研究力強化型「国際的研究活動」研究費を使っておこなった。記して感謝申し上げる。

[註]

- 1 本研究のインタビュイーであるオーヘイガンは、チェンバレンの著作から影響を受けて精神障害者の運動に関わるようになった (O'Hagan 2014: 119-121)。
- 2 キャンベルは、SSO の最初の秘書 (secretary) であり、グループの初期の発展において鍵となる役割を務めた人である (Crossley 2006: 182)。
- 3 1970 年代イタリアのトリエステ県を中心に精神医療改革がおこなわれた。それについての情報がヨーロッパ中で交換されるようになり、「精神医学への代替のためのヨーロッパネットワーク (European Network for Alternatives to Psychiatry: ENAP)」の結成会議が 1974 年にポルトガルで開催された。そして、1982 年の ENAP の会議でその英国支部である BNAP を結成することが決定した (Crossley 2006: 170)。
- 4 モリソンは、精神障害者としての経験と精神医療の専門職としての経験の両方をもつ社会学者という立場で、米国の精神障害者の運動の参与観察などをおこなった (Morrison 2005: chap. 2)。
- 5 英国では、1946 年に精神保健全国同盟 (National Association for Mental Health: NAMH) が発足した。NAMH は、1913 年に発足した精神障害者を支援するボランティア組織、1922 年に発足した専門家の助言を普及させるための教育や宣伝をおこなってきた組織、1927 年に発足した子どもの指導のためのクリニックを開設しその職員の養成をおこなってきた組織の 3 つの組織が合わさることで発足した (Crossley 2006: 70)。1960 年代 NAMH は、精神医学と新宗教 (scientology) の対立や資金不足などによって、方向性やアイデンティティを失っていた。そこで、1970 年にマインドキャンペーンという新しい活動を始めた。これによって活動はより政治的なものとなり、権利や賛否両論の治療に関心を寄せるようになった。このとき組織の名称がマインドに変更された (Crossley 2006: 135-136)。
- 6 1997 年の総会でなされた決定についてオーヘイガンは、自身は出席できなかったが、WNUSP の運営委員会や議長、そのほかの機構や活動は 1999 年の総会の前にはまだできておらず、名称変更後なされたことは唯一メーリングリストが開設されたことだけだったと聞いたと述べている (O'Hagan 1999)。
- 7 1997 年の総会の際には 10 人が WNUSP 委員に選ばれた。議長は設けず、すべての委員が平等に責任を負うこととされていた (WNUSP 1997)。
- 8 この決議は、私という一人称で書かれている箇所が複数あり、それが誰を指しているのかは不明である。
- 9 イスラエルからの出席者が登録されてはいた。その人は、もう 1 人の参加者とともに関約の議論の際に「修正／付録」を規約に含めることを提案したところ、それは却下され、投票の仕方の変更などを要求したが、それも受け入れられなかった。その後、2 人は会議から出て行ってしまった (WNUSP 2001)。このため理事選出の際にアフリカ・中東地域の出席者がいないという事態が起きたと考えられる。
- 10 WNUSP の総会資料には「The National Empowerment」(WNUSP 2001) と記載されているが、これはチェンバレンが設立に貢献した全国エンパワメントセンター (National Empowerment Center) のことであると考えられる。

[文献]

- Brody, Eugene B., 2004, "The World Federation for Mental Health: Its Origins and Contemporary Relevance to WHO and WPA Policies," *World Psychiatry*, 3 (1): 54-55.
- Campbell, Peter, 1996, "The History of User Movement in the United Kingdom," Tom Heller, Jill Reynolds, Roger Gomm, Rosemary Muston, and Stephen Pattison eds., *Mental Health Matters: A Reader*, London: Macmillan Press Ltd, 218-225.
- Chamberlin, Judi, 1987, "The Case for Separatism: Ex-Patient Organization in the United States," Ingrid Backer and Edward Peck eds., *Power in Strange Places: User Empowerment in Mental Health Services*, London: Good Practice in Mental Health, 24-26.
- , 1990, "The Ex-Patients' Movement: Where We've Been and Where We're Going," *The Journal of Mind and Behavior*, 11 (3/4): 323-336.
- Crossley, Nick, 2006, *Contesting Psychiatry: Social Movement in Mental Health*, Oxon: Routledge.
- Driedger, Diane, 1989, *The Last Civil Rights Movement*, London: Hurst & Company, New York: St.Martin's Press. (= 2000, 長瀬修訳, 『国際的障害者運動の誕生——障害者インターナショナル・DPI』エンパワメント研究所.)

- European Network of Users and Ex-Users in Mental Health, 1994a, "The Second European Conference of Users and Ex-Users in Mental health," (2016年4月9日取得, <http://www.enusp.org/index.php/events-dates/144-second-european-conference-of-users-and-ex-users-in-mental-health>).
- , 1994b, "Our Own Understanding of Ourselves," (2016年4月16日取得, <http://www.enusp.org/enusp-events-dates/congresses/kolding.pdf?phpMyAdmin=f62c3a4496df92b2798ee4de97870d4d>).
- McLean, Athena Helen, 2000, "From Ex-Patient Alternatives to Consumer Options: Consequence of Consumerism for Psychiatric Consumers and the Ex-Patient Movement," *International Journal of Health Services*, 30 (4): 821-847.
- 美馬達哉, 2016, 「脱精神医学化の二つのエッジ——RDoC (研究領域基準) とマッドネス」『現代思想』44 (17): 73-89.
- Mind, 2017, "A History of Mind," (2017年9月2日取得, <https://www.mind.org.uk/about-us/what-we-do/our-mission/a-history-of-mind/>).
- Morrison, Linda J., 2005, *Talking Back to Psychiatry: The Psychiatric Consumer/ Survivor/ Ex-Patient Movement*, New York and Oxon: Roudledge.
- 村上満子, 2004, 「デンマークで開催された WNUSP に参加して感じたこと」, 全国「精神病」者集団『絆 No. 12——特集: 2004年世界精神医療ユーザー・サバイバーネットワーク総会報告』障害者団体定期刊行物協会, 41-42.
- O'Hagan, Mary, 1999, "Fax Message; 19 July 1999; To Iris Holling".
- , 2014, *Madness Made Me*, Wellington: Open Box.
- , 2016-i1, 2016年9月3日オーヘイガン自宅 (ウェリントン) にてインタビュー (前半: 1回目).
- , 2017-i1, 2017年7月31日メールでのインタビューへの回答.
- Porter, Roy, 2002, *Madness: A Brief History*, New York: Oxford University Press.
- Scull, Andrew, 2016, "A Psychiatric Revolution?," *Madness in Civilization*, London: Thames & Hudson, 358-411.
- World Federation of Psychiatric Users, 1991, "WFPU First committee meeting, Mexico City," (2017年9月3日取得, <http://wnusp.rafus.dk/wfpu-first-committee-meeting-mexico-city.html>).
- , 1993, "原題不詳." (= 1993, 安沢洋明・大畑清・山本深雪訳「WFPU ニュースレター No. 2」藤枝友の会.)
- World Network of Users and Survivors of Psychiatry, 1997, "The Members of the 1997 - 1999 Panel," (2017年7月16日取得, <http://wnusp.rafus.dk/the-members-of-the-1997-1999-panel.html>).
- , 1999a, "Minutes of meetings, 6-10 September 1999, Chile," (2017年7月15日取得, <http://wnusp.rafus.dk/minutes-of-meetings-6-10-september-1999-chile.html>).
- , 1999b, "Resolutions, Santiago 1999," (2017年7月15日取得, <http://wnusp.rafus.dk/resolutions-santiago-1999.html>).
- , 2000a, "Proposal for Establishment Costs"
- , 2000b, "Interim Committee Meeting Odense, 2nd and 3rd November 2000," (2017年7月16日取得, <http://wnusp.rafus.dk/interim-committee-meeting-odense-2nd-and-3rd-november-2000.html>).
- , 2001, "Minutes: Initial Congress of WNUSP, 20th and 21st July 2001 in Vancouver," (2017年7月15日取得, <http://www.wnusp.net/documents/GeneralAssembly2001.pdf>).
- , 2002, "Minutes of Board Meetings, 6th November 2002," (2017年7月17日取得, <http://www.wnusp.net/index.php/minutes-of-board-meetings-6th-november-2002.html>).
- , 2003a, "Minutes of Board Meetings, 4th April 2003," (2017年7月17日取得, <http://www.wnusp.net/index.php/minutes-of-board-meetings-4th-april-2003.html>).
- , 2003b, "Minutes of Board Meetings, August 8th 2003," (2017年7月17日取得, <http://wnusp.rafus.dk/minutes-of-board-meetings-august-8th-2003.html>).
- , 2003c, "Minutes of Board Meetings, November 28th 2003," (2017年7月17日取得, <http://wnusp.rafus.dk/minutes-of-board-meetings-november-28th-2003.html>).
- , 2004a, "Jointed European and World Conference of Users and Survivors of Psychiatry: 2nd Announcement," (2017年7月17日取得, http://wnusp.rafus.dk/documents/vejle04_invitation.pdf).
- , 2004b, "Minutes: General Assembly of WNUSP 17th- 21st July 2004 in Vejle, Denmark," (2017年7月17日取得, http://wnusp.rafus.dk/documents/vejle04_assembly_minutes.pdf).
- , 2009, "WNUSP Kampala Declaration 2009," (2017年9月6日取得, http://www.wnusp.net/documents/WNUSP_Kampala_Declaration2009.pdf).
- , no date a, "World Network of Users and Survivors of Psychiatry"
- , no date b, "Statutes"

Building Solidarity While Having Disagreement: Organization Structure of the Global Grass-Roots Movements of Users and Survivors of Psychiatry

ITO Kasumi

Abstract:

Previous research on movements of persons with psychosocial disabilities mainly focused on their claims rather than how they organized the movements. They have analyzed differences and conflicts of claims among movements, but did not pay much attention to the structure of solidarity among these groups. The purpose of this paper is to reveal how persons with psychosocial disabilities, who are in different situations and have different claims, manage to develop solidarity. This paper studies a case of the World Network of Users and Survivors of Psychiatry (WNUSP), the world network of persons with psychosocial disabilities. An analysis of discussions in the WNUSP is performed focusing on the time when WNUSP adopted their statutes at the General Assembly in 2001. The analysis utilized the minutes of WNUSP's General Assembly and conducted interviews with the first chair of the WNUSP. Results revealed that WNUSP's membership allowed more than one national organizations to obtain full memberships so that member organizations could develop solidarity while having disagreement to each other. WNUSP also encouraged its members to promote their local movements, rather than setting their common opponent for persons with psychosocial disabilities, such as mental health system.

Keywords: persons with psychosocial disabilities, global movement, grass-roots movement, psychiatry, resource mobilization

対立したままでの連帯

——精神障害者のグローバルな草の根運動の組織構造——

伊 東 香 純

要旨：

これまでの精神障害者の社会運動の研究は、運動の主張に焦点を当ててきた。それらの研究は、運動の主張の相違や対立は考察してきたものの、運動の組織の構造には注目してこなかった。そこで本研究は、どのようにして精神障害者が主張の対立や状況の相違のあるなかで連帯してきたかを明らかにすることを目的とする。そのために精神障害者の世界規模のネットワークである WNUSP を検討の対象とする。WNUSP の議事録や初代議長へのインタビューを資料にして、WNUSP が会員規約を含めた内規を採択する 2001 年の総会の前後を中心に組織内の議論を分析した。その結果 WNUSP は、1 つの国から複数の全国組織を正会員として認めることによって、国内の対立があるままで世界組織としての連帯を可能にしたことが明らかになった。また、世界組織において精神障害者は、精神医療といった特定の敵手を定めずに、各国の活動を促進するという運動の方針をとってきた。